

感染症

座長：高 山 真一郎

小児の化膿性関節炎・骨髓炎は、現在でも高度な四肢の変形・短縮および変形性関節症の原因となることもまれでなく、小児整形外科領域では重要な位置を占める。小児の感染症においては、発症初期の鑑別診断と速やかな治療開始が予後を左右することは言うまでもない。

今回のセッションでは 5 題の発表があった。大阪市立総合医療センターの北野先生の発表は、8 歳時にペルテス病に併発した化膿性股関節炎に対し、関節鏡視下手術が有効であったとの報告だが、継続的なドレナージが必要であったか否かについて議論がなされた。自治医科大学の石川先生の発表は B 群溶連球菌による新生児化膿性股関節炎の報告であったが、これまでの報告のように開排制限が診断のきっかけになっていた。仙台赤十字病院の神谷先生からは、新生児化膿性股関節炎から Brodie 膿瘍に至った症例が報告されたが、骨端軟骨を越えて骨幹端部に病変が波及したとの見解であった。鹿児島大学の川畑先生は極めてまれな 1 歳児の結核性骨髓炎の 2 例を報告したが、生後 3~4 か月で BCG 接種が行われるようになってきたことが関与するとの考察がなされた。近畿大学の斎藤先生からは、膝蓋骨に嚢胞状変化をきたした 11 歳男児の膝蓋骨骨髓炎とサルモネラによる 16 歳男性の大腿骨骨髓炎のまれな 2 例が報告された。